

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年(三十六)

第一章 民族主義と社会主義のうねり(二十)

三十六・英雄ナセル…東西両陣営を手玉に取るアラブの星(一一三)



アラブ世界で誰しもが認める英雄と言えば十二世紀にイラクのティクリートで生まれたサラディン(サラーフ・アッディーン)であろう。彼はエジプトを征服してアイユーブ朝を創設、また英国王リチャード一世による第三回十字軍と戦った勇士である。この時十字軍側が捕虜を皆殺しにしたのに対してサラディンは捕虜を殺さなかった。このことから彼は敵味方を問わずに愛され、英雄として歴史に名を残している。

サラディンから八百年後の二十世紀のエジプトに現れたナセル(ガマール・アブドウルナセル)もアラブの英雄と讃えられている。サラディンが中世ヨーロッパのキリスト教十字軍と戦った英雄であったのに対し、ナセルはイギリスの保護国であったエジプトの王制をクーデタで打倒(1952年)、さらに西欧帝国主義国家の英仏を相手にスエズ運河の国有化を勝ち取っている(1956年)。

軍士官学校卒業後スーダンに赴任、1918年にエジプト地中海沿岸の都市アレクサンドリアに生まれたナセルは陸軍士官学校卒業後スーダンに赴任、1948年のイスラエル独立宣言を契機に始まった第一次中東戦争では少佐とし

て従軍した。この戦争でアラブが致命的な敗北を喫すると(ナクバ・大災厄)、彼は反英愛国の将校組織「自由将校団」を結成、1952年にクーデタでファルーク国王を追放した。エジプトは専制君主制から共和制に移行したのである。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: [Arehakahazuyai@gmail.com](mailto:Arehakahazuyai@gmail.com)